

【PS02】 機械少女の物語

(∴)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

PSO2本編のメインシナリオに自己解釈を付け加えた小説です。

Pixivでも同名のタイトルで現在連載しておりますので、こちらで当小説に興味を持たれた方は是非そちらの方も見てやってください。

(一応週1のペースを目指しておりますがこちらでは不定期となります。)

序章

目次

1

序章

オラクル——

それは、惑星間を自由に旅する巨大な船団。

その誕生とともに、外宇宙への進出が可能となり、新たな歴史は始まった。

そして今や、その活動範囲は数多の銀河に渡る。

行く先々で見つかった、未知の惑星に『オラクル』内で編成された部隊『アークス』が、惑星に降下し、調査を行う。

『アークス』は、『オラクル』に存在する四種族からなる。

バランスに秀でたヒューマン——

フォトンの扱いに長けたニューマン——

屈強な身体を持つキヤスト——

高い攻撃力を誇るデューマン——

——それぞれが補い合い、協力する事で『アークス』は初めて成り立つ。

「……どうやら到着したらしい。これより向かうは『惑星ナベリウス』。文明は存在せ

ず、原生生物は凶暴。油断はせず、警戒を怠らないように。」

…。

…。

…。

『新たに誕生する『アークス』よ。今から諸君は、広大な宇宙へと第一歩を踏み出す。』
キャンプシップの通信機越しに、白銀の身体のキャスト、しかしどこか壮厳で、威圧感のある声が聞こえる。

説明は、アークスになるための教習本でも載っていたような事を繰り返されたただだ。

オラクルの歴史だの、アークスの歴史だの、ぶっちゃけそんなものはどうだっていい。実際自分だって『なんでアークスになりたいのか』すらわかっていない。

ただ、適性として向いていただけだ。そこに目的などもない。

辺りを見回せば、このキャンプシップに乗っているのは、積載人数の限度としては4人、そして、見渡す限り4人全員そろっている。

教習中に交流があつた人物がいたわけでもないため、ボーツしていると、ゲート近くに突っ立っている少年と目が合った。

『覚悟を決め、各々をパーソナルデータを入力せよ。我々は、諸君を歓迎する』

言われた通り、パーソナルデータ（個人情報）の入力を終えると、すでに済ませていたのか、せつせとテレプールヘジャンプしていく研修生が2人ほど見えた。

しかし、先ほどからテレプール近くで突っ立っていた少年は何か呆れたように肩を竦めて残っていた。

彼もせつせと行ってしまうような感じだったため、少々意外であった、人は見かけによらないとはよく言ったものだ。

「はあく、肩の凝るありがたいお言葉なこと。みんな承知の上で来てるつてのによ。」
先ほどの通信による話に愚痴を零していた。

……まあ正直私もあのキャストの話は、歳をとった老人が話しに夢中でついつい長引くモノと似たようなものだと感じていたが。

と、これ以上ボーツとしているのもあれなので、とりあえず目の前にいる少年に声をかけようと近付く。

「ん？あ、俺はアフィンって言うんだ。よろしくな、相棒！」

「なんだその服!？」

「ぶっ!!」

私の第一声に驚いたのか、アフィンと名乗った少年は噴き出してしまふ。

彼の服装は上だけ見ればそう大して驚く事ではない。実に普通の、それもレンジャークラスのアーキウスが好みそうな服装だ。

問題は下だ。

彼のルックスは悪くないし、整っている。いやむしろ童顔と言った方がわかりやすい。身長は……私より少し、ほんの少くくし大きめと言ったところだろう。

だからと言って男が下に『内腿を晒す』ような服を着るのはセンスを疑わざるをえない。

「ちよつ、第一印象がそこかよ！つか、お前こそなんつう恰好してんだよ！」

「は？」

彼は、私の格好にツツコミを入れてきた。

別に『ウケ』を狙ってきた服装、というわけではないのだが……。

因みに、私の服装はと言えば、胸や太ももなど、局所的に露出されている服装だ。あとはちよつと気に入ったから、アホ毛を通すために専用の穴を空けて被っているアイハットか。他にもゲンガマフラー、ワイルドマフラーと言った2枚のマフラーを首に巻いている。

服装の製品名は確か——『ロストパープル』と書いてあったか？

まあこれは服装と言うより——

「どう考えたって俺の服より露出多いじゃねえか！お前こそ何なんだよその服装は!!」
「人をコスプレイヤーみたいに言うんじやあないツ！その内腿にキンカン塗ったくるぞ
！」

「うるせえよ！別に虫刺されで痒くなるわけじゃねえよ!!」

くだらない論争でせえ、せえ、と息を漏らす。

なんとという事だ。まさか最終試験を始める前にこんなに体力を使うとは。そもそもアフィンがこんなマニアックな服装を着ているのが――

「ああもう！やめだやめ！これ以上こんな事で言い争ったって意味ないだろ!?俺たち、一応試験生なんだからさ！」

「んー……これそんなに露出多い？」

「多いわ!……はあ、そういや相棒……って、そういや名前聞いてなかったな。お前、名前なんていうの？」

「イグニス、だよ。まあ相棒でも名前でもアンタの呼びやすい方でいいよ。」

「わかった、んじや、これからお前の事相棒って呼ぶことにする。たまたまとはいえ、同じ組になった……なっちまったって言った方がいいのかもな、ま、仲良くしていこうぜ」
アフィンの気軽な挨拶に、自分は少し安心する。

いや、だってさつき初対面であんなくならない論争から始まったんだよ？そりや

ちよつとは先行き不安にはなるのだが……案外アフィンはどういうことを気にしない性格なのかもしれない。

「——それにしても、さつきのお偉いさん、ずいぶんと聞き心地のいいことしか言わないんだな。いや、嘘とまでは言わねえけどよ……」

「……あー……何だっけソレ」

「何って、おいおい忘れたのか？十年前にあつたアレを。」

「十年前……あ……あ……？最近学んだことのような気がするのに……何かキャストになる前の記憶はほとんど残ってないんだよな……」

「キャストになる前？って相棒、相棒もしかしてキャストなのか？」

「ん？言わなかったっけ？あと私のこの服、一応は義体なんだ。」

「……そうだったのか、あんまりヒューマンに近いもんで気付かなかつたよ。あとゴメンな、さつきは知らなかったにせよ、お前の体の事言いすぎて」

「んやー、ぶつちやけコレ『特注品』でき、初見でキャストだつてわかる方が中々なモンですよ」

アフィンの謝罪の言葉にそう返す。

——そう、私の身体は大半が生体で出来た『義体』だ。

キャストになった人間ならわかるだろうが、私たちは後天的に生み出される種族だ。

フオトンを扱う才能に長けているのに、その才能に肉体が追いつかない。それは非常に「もつたない」ということで、アークスの『上層部』が『当人の意思関係なく』体をキャスト化させてしまう。

私の場合、アークスという存在を知った頃に身体が才能に追いついていない事が判明したため、『治療』という一環でキャストになった。ただ、その『治療』を施したのは上層部ではないらしい。その辺の事を追求しても、結局空回りだった。まあ、今となつてはどうでもいいが。不便はないし、私は今の身体が気に入っているし。

「まあ覚えてないならいいや、アークスも人材確保で必死つて事なんだろうしな。俺は俺でやりたい事あるし、特に気にしてないけどさ」

「ふーん……ま、お互い色々あるつて事か。」

アークスは今のご時世花形みたいな職業だが、それには当然相応の危険が伴う職業だ。

アフィンのやりたい事というのはわからないが、目的を持っているだけ私よりは幾分かマシだろう。

……私は、何を目的にアークスになろうか——？

そう考えていると、唐突にキャンシップ内に通信が入る。

『転送座標の再設定終了。まだ残っているアークスは順次、出撃してください』

若い女性オペレーターの声が響く。

すると、先ほどまでは反射しているだけのただの液体であったゲートが、降りる座標を定めて、その地形を映していた。

「おつ、準備が出来たみたいだな。初陣らしく、ぬるーい地域みたいだぜ？ま、気楽に行くとしようぜ」

言い終えると、アフィンはテレプールへと歩いていき、私もそれを追うように歩いて行った。